

会長の時間 第 22 回 子どもの能力と善行褒賞

日出ロータリークラブ

会長 加賀山 茂

はじめに

これまでの会長の時間で、私は、ロータリークラブの基本的な理念について、「四つのテスト」の意味（第 1 回）、「ロータリーの目的」の意味（第 2 回）、「五大奉仕部門」（第 3 回）、「公平とは何か」について、タクシーの相乗りの場合の料金の公平な負担について検討させていただき（第 5 回）、「微笑みを微笑みで返す」とか「いただいたら、お返しする」とかという共感脳の抱える「やられたら、やり返す」というジレンマ（第 6 回）、偽りの親睦と四つのテストの関係（第 7 回）、新型コロナウイルス感染症対策（第 8 回）、善行とは何か（第 9 回）、善行褒章とその基準（第 10 回）、善行褒章基準の日独比較（第 11 回）、子ども食堂（第 12 回）、地方創生（第 13 回）、コロナ禍における国民の三大義務の支援（第 14 回）、機会の三つの扉の応用（第 15 回）、前期の反省と後期の抱負（第 16 回）、今年度後期の抱負と提案（第 17 回）では、Web 例会の可能性について話し、前回には、日出ロータリークラブが、近隣のクラブに先駆けて対面とリモートを併用したハイブリッド例会を実現した意義、SDGs と日出ロータリークラブとの関係（第 19 回）について、オンライン会議を紹介したのを契機に、Zoom の使い方（第 20 回）、日出町で問題となっているイスラム教の墓地の問題（第 21 回）について、話しました。



そして、いずれの回においても、本年度の RI 会長（Holger Knaack 氏）のテーマである「ロータリーは機会の扉を開く」を活用させていただき、3 つの扉の色に即して、**赤い扉**は、「親睦（和らぎ睦び）」として、**黄色の扉**は、「職業倫理の向上」として、**青の扉**は、「次世代への奉仕活動の実践」として整理させていただきました。

今回は、今年度の「善行褒賞」が終了したので、その反省を兼ねて、「子どもの能力と善行褒賞」について、話したいと思います。

1. SDGs が描く 10 年後の世界と子どもたちの将来

(1) SDGs の世界

SDGs（Sustainable Development Goals：持続的開発目標）は、人類が地球資源の 1.69 倍を使っている現在の状況は、人類を破滅に向わせているとの反省の下に、人類の生活を根本的に改革し、地球資源の 1 個分の活用に戻そうとする 10 年後の世界を見据えた提言です。

SDGs は、17 のゴール（大きな目標）と、169 のターゲット（具体的な目標）から成り立っています。しかし、17 も 169 も多すぎる数なので、国連は、17 の目標を **5 つの P**（People（人）、Prosperity（繁栄）、Planet（地球）、Peace（平和）、Partnership（パートナーシップ））にまとめてくれています。

しかし、**5 つの P** のうち、People と Prosperity の 2 つの項目には、6 個ものゴールが入っており、まだまだ、項目の数が多すぎます。

そこで、私は、5 つの P の項目の中身を最大でも 3 項目に収まるようにまとめ直して、以下のような図を作成してみました。この図だと、1 項目には、最大でも 3 つの項目しか入っていないため、SDGs の理解がスムーズに進むと思っております。



(2) 10 年後の子どもが直面する現実

SDGs の特色は、人が行うべき行動について、昔から日本に伝わっている近江商人の職業倫理である「三方よし」、すなわち、「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」だけでなく、さらに、「未来よし」の一項目を追加して、「四方よし」へと進化させたものです。

人間は、とかく、目先の利益に心を奪われて、自分の人生よりも先の将来のことについては、無責任になりがちです。たとえば、現代の年金生活者たちは、自分が年金をもらえておりさえすれば、若い世代は、おそらく、十分な年金をもらうことができなくなるのがほぼ

確実であっても、仕方のないことだと諦めています。

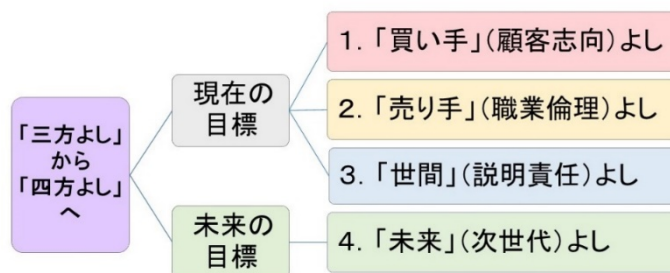
これでは、若い世代が憤慨するのは当然であって、年金生活者の世代は、まさに無責任世代といってもよいでしょう。

こういう事態ですから、子どもたちが、現在の親の世代の行動を信頼しておらず、世代間ギャップが増大しているのは、当然の結果といえるでしょう。

ロータリアンの世代が、青少年に対する奉仕活動をもっともっと力をいれるべき理由は、この点に存在しています。私たちは、将来の世代が利用すべき資源を食い散らしてはいけません。

その上、AI 等の革命的な科学技術の発展によって、10 年後に若い世代が直面する世界は、これまでの常識が通用しないような過酷な世界になっていることでしょう。したがって、今の子どもたちは、そのような過酷な世界でも通用する能力を身につけなければなりません。

子どもたちに、どんな社会になっても生き抜く力をつけてあげることこそ、私たちが行わなければならない責務なのです。



2. 善行褒賞で子どもたちに語ったこと

(1) 善行を金メダル、銀メダル、銅メダルに譬えて話す

私は、SDGs の考え方を参照しつつ、未来を担う世代に対して、善行褒賞に際して、以下のようなスピーチを行いました。

皆さん、「善行褒賞」を受賞され、おめでとうございます。

皆さんは、「私は、普通のことをしただけなのに、褒めていただけてうれしいです。」と思われているかもしれません。

でも、褒賞されるからには、皆さんの行ってきたことは、とても素晴らしいことなのです。

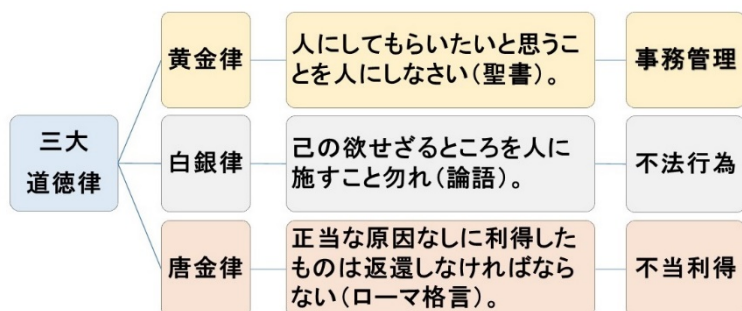
私たちは、「良くないことや悪いこと」はすぐに気が付きます。ところが、何が良いことなのかはあいまいです。

そこで、良いこととは何かを、金メダル、銀メダル、銅メダルに分けて考えてみましょう。

金メダルは、イエス様がいわれた、「約束したわけではないけど、他人がしてほしいと思っていることをしてあげる」ことです。道がわからないとか、勉強で分からないで困っている人がいたら進んで教えてあげるのがその例です。落とし物を拾って届けてあげるのもその例ですね。別に約束しているわけでもないのに、進んでやるのが尊いのです。

銀メダルは、孔子様がいわれた、「自分がしてほしいことは、他人にもしない」ことです。悪さをしないだけでなく、もしも悪さをされても、やり返したり、仕返しをしたりし

ないで我慢することがその例です。



銅メダルは、ローマの人々が言っていた「約束しなくても、元通りにして返す」ことです。他人のものを使ったらきれいに掃除して元通りにするのがその例です。

皆さんは、銅メダルや銀メダルよりも金メダルがいい

と思われるかもしれませんがね。でも、心配はいりません。銅メダルでも、銀メダルでも、少し工夫をすれば、金メダルに変えることができます。

たとえば、人の物を借りて使った時に、元通りにして返すことは銅メダルですが、もともとが少し壊れている場合に、それを直して、元よりも少し良くして返してあげれば、それは、「約束したわけではないけど、他人がしてほしいと思ったことをしてあげている」ことになるので、金メダルに昇格します。

また、悪さをされても、やり返さずに我慢することは大切なことで、銀メダルに値しますが、もしも、悪いことをされたら、「もっとやって、気が済むようにしていいよ」と言ったら、相手もびっくりして、仲直りができるかもしれませんね。そうしたら、銀メダルは金メダルに昇格です。

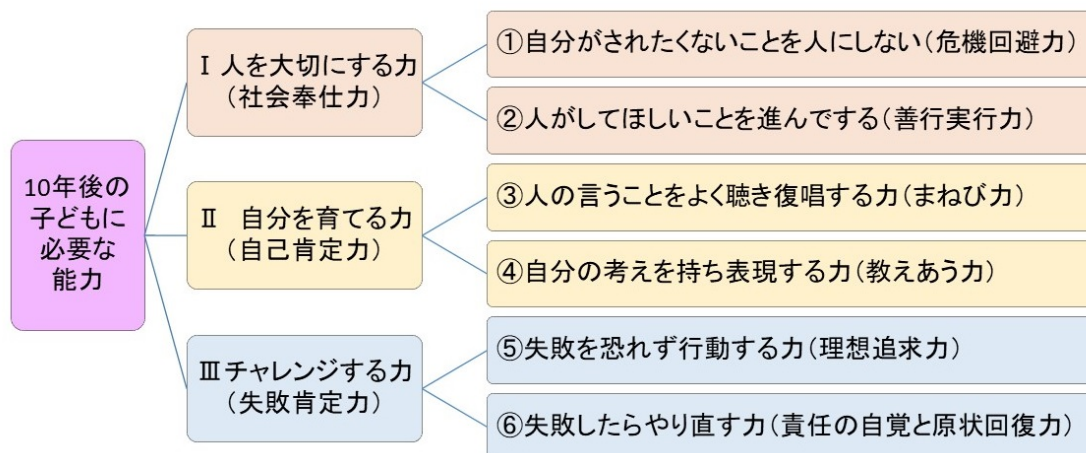
今までの話は、「善行＝良いこと」とは何かについて、大まかな例を挙げただけです。もっと、具体的で詳しい「良いこと」の例としては、もう少し大きくなったら皆さんが習う、国連が決めて世界中の人が「良いこと」と認めている SDGs (持続的開発目標) が、17 の「良いこと」をはっきり決めていますから、皆さんも、SDGs の 17 のゴール (みんな金メダルです) を検索してみて、今後の善い行いの方針にしてみてください。

話しが少し難しくなりました。改めて、皆さんが「善行褒賞」を受賞されたことをお祝いいたします。おめでとうございます。コロナ禍でお忙しい中、貴重な時間を割いてくださった先生方にも、厚くお礼申し上げます。

(2) 10 年後の子どもの必要となる 3 つの能力

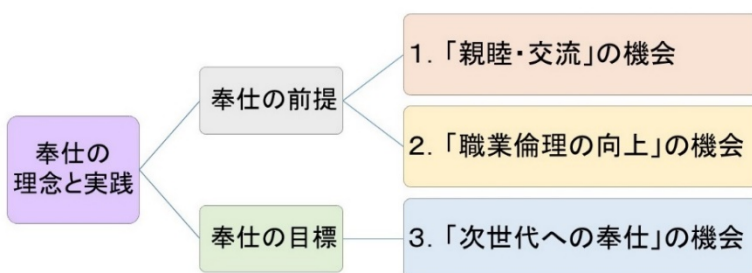
若い世代を育てるためには、SDGs と同様に、少なくとも、10 年後の世界を思い描いて、教育目標を考える必要があります。

私は、0 歳児教育から始めて、家庭教育から、保育・幼稚園教育、初等教育、中等教育において、どのような研究が進行しているのかを調べてみました。そうすると、どの教育段階においても、以下の 3 つの教育目標 (①人を大切にする力、②自分を育てる力、③チャレンジする力 (木村泰子『10 年後の子どもの必要な「見えない学力」の育て方』青春出版 (2020/11/20) 参照)) が重要視されていることに気がつきました。



(3) ロータリーの目的との比較

子どもに必要な3つの力（人を大切にする力，自分を育てる力，チャレンジする力）について検討してみると，この3つの力は，実は，私たちロータリアンが身につけるべき活動，すなわち，親睦（人を大切にす



る），職業倫理の向上（自分を育てる力），奉仕活動（チャレンジする力）と全く同じであることに気づきました。

つまり，青少年奉仕活動を行うことが，将来のロータリアンを育てることに直結しているのです。

2. 善行褒章基準の再検討

(1) 子どもに必要な能力と善行との関係

これまでの善行褒賞は，校長会の発案で，「挨拶賞」，「親切賞」，「努力賞」，「奉仕賞」の4つに分類されて，褒賞者が決定されてきました。

相手方の意向を尊重することは重要なので，そのこと自体に全く問題はないのですが，それらの賞の相互の関係と全体の位置づけを明確にしておくことは，重要だと思われます。

そこで，上記の各賞を，これまで検討してきた，10年後の子どものに必要な能力（①人を大切にする力，②自分を育てる力，③チャレンジする力）に即して，再構成してみました。

(2) 現在の挨拶賞，親切賞，努力賞，奉仕賞の再構成

そうすると，これまでの，善行褒賞の各賞は，右の図のように再構成されることがわかりました。

今後は，校長会とも相談の上，10年後の子どもに必要な能力と照らし合わせながら，各賞の褒章基準を策定することが必要だと思われま



4. 参考文献

- ・伊藤美佳=齋藤恵（マンガ）『マンガでよくわかるモンテッソーリ教育×ハーバード式子どもの才能の伸ばし方』かんき出版（2020/2/17）
- ・新井紀子『AIに負けない子どもを育てる』東洋経済新報社（2019/9/19）
- ・石川一郎『2020年からの新しい学力』SB新書（2019/9/15）
- ・石戸奈々子編『日本のオンライン教育最前線ーアフターコロナの学びを考える』明石書店（2020/10/1）
- ・大川繁子『92歳の現役保育士が伝えたい親子で幸せになる子育て』実務教育出版（2019/9/11）
- ・岸見一郎『アドラー心理学入門ーよりよい人間関係のために』ベストセラーズ（1999/09）
- ・木村泰子『10年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方』青春出版（2020/11/20）
- ・西 剛志『脳科学者が教える子供の自己肯定感は3・7・10歳で決まる』PHP研究所（2020/4/2）
- ・平川理恵『クリエイティブな校長になろうー新学習指導要領を実現する校長のマネジメントー』教育開発研究所（2018/4/6）
- ・幕内秀夫『子どもをじょうぶにする食事は，時間も手間もかからない』ブックマン社（2019/10/10）
- ・宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書（2019/7/25）
- ・諸富祥彦『スマホに負けない子育てのススメ』主婦の友社（2018/9/30）
- ・リヒテルズ直子『今こそ日本の学校に！イエナプラン実践ガイドブック』教育開発研究所（2019/9/1）
- ・リヒテルズ直子『手のひらの5円玉ー私がイエナプランと出会うまでー』ほんの木（2020/10/21）
- ・渡辺信一『AIに負けない「教育」』大修館（2018/8/1）

